（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	つくば市福祉支援センターさくら			
○保護者評価実施期間	令和7年12月26日		～	令和8年2月20日
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	43	（回答者数）	20
○従業者評価実施期間	令和7年12月26日		～	令和8年2月20日
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	11	（回答者数）	10
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年3月26日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	支援の枠組みがあり、保育等で行われる生活スタイルをベースにした子どもらしい生活環境のなかでのバリエーションのある活動を展開しながら、個々に合った支援を提供している。	保育等の子どもらしい生活スタイルをベースにした活動でプログラムを構成している。小集団のなかでは諸経験の機会を提供することが発達上必要と考えて活動の提供を行っている。そのなかで、子どもそれぞれが遭遇する課題を見極め、個別的に支援を進めていっている。	各年齢層（生活年齢及び発達年齢の両面で）に合った活動や遊びを充実させていきたい。経験して終わりではなく、また、スキルを獲得できることだけが目的ということでもなく、意欲的に取り組み充実した経験になるような活動を提供できるよう工夫し、子どもそれぞれの課題も解消していくよう方策を検討しながら支援を進めていきたい。
2	親子通園であることの特長を活かし、保護者とのコミュニケーションを多くとっている。スタッフからの発信も保護者からの求めもタイムリーに行うことができ、子どもの状態の共有や助言がしやすい。	保護者支援に力点を置くことから親子通園としているが、普段の家庭等での悩みや困りごとについて常にアンテナを張るようにしている。家庭等でのことを聞き取りながら今の発達の様子を一緒に確認し、助言をするようにしている。また、事業所内の様子だけでなく、地域（幼稚園・保育所等）での様子も把握しながら保護者と共有するようにしている。	子どもの状態像を正確に把握することが的確な助言の前提でもあるので、スタッフのアセスメント力を高めていく。内部研修が進まないところがあったので、改善していく。また、助言のみならず、保護者への寄り添いも大切で、個々の状況やニーズに合わせた寄り添いの方法も模索していく。
3	利用者の全体的な満足度が高い。子どもの意欲を引き出し、保護者のニーズに一定以上応えることができている。	子どもの活動する枠組みを設定しながら、それらの活動に興味を持ちやすくなるような工夫を試行錯誤し主体的な参加を促している。スタッフも子どもへの応答性を高めていることで、子どもがスタッフに会えてうれしいと感じられる環境になっている。保護者にとっても、行けば何でも相談できると思ってもらえるような雰囲気作りを心がけている。	多くの方にご満足いただいているという結果ではあるが、年度途中で利用終了になった方もいる。出席の多寡も利用者ごとに違いが大きく、スタッフ内でも個々に支援が行き届いていたかどうか疑問に思い省みる向きもあった。個々のニーズは複雑でもあり、支援のあり方を決めつけず幅広い視野を持ち、自己満足の支援に陥らないようにしたい。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保育所・幼稚園等との交流やその他地域で他の子どもとの活動機会が限定的である。	それぞれの子が、並行通園をしていることが多く、利用児自身にとってあえて機会を持つ必要が少ないことと、事業所の方針として一人当たりの利用日数を多く設定できないために地域との交流の機会を設定しづらいことが理由として挙げられる。	事業所の全体的な支援方針（利用日数）の性質上、交流を優先的に検討することは難しい。ただし、一部のクラスにおいて特に地域との交流があまりないような対象児について、引き続き交流の機会を持ち充実させていく方策を検討するとともに、地域にとっても意義のある交流の内容について考えていきたい。
2	事業所で、家族への研修会や情報提供の機会等が確実には行われていない。	事業所において保護者支援の一つとして勉強会や情報提供の機会は大切と考えているが、一部のクラスにおいて一定程度実施していることはあるものの、各クラスの状況においてそうしたことが等しく実施できてはいない。	それぞれのクラスにおいて、どういった内容のものが必要かを今一度検討して整理し、各クラスの限られた時間において、どのような形であれば実施できるかを検討したい。
3	保護者会の活動に対し、協力できていることが限られていることと、きょうだい児の支援について手薄であること。	保護者会においては、昨今の支援の枠組みを変更してきたことなどから、利用者が多様な利用の仕方をするようになった（特に在籍年数が大きく減った）なかで会の活動自体が縮小傾向にある。児童発達支援センター開設に向けて当事業所は閉鎖予定であることもあり、保護者会の継続が前提になっていないことも大きな要因である。	保護者会については、活動縮小のなかでも、意義のある事柄があれば残していくことを、保護者会と一緒に方策を考えたい。利用者にとっての事業所のニーズが変化してきたなかで、今までと同じことは望めないので、今に合った方法を探りたい。きょうだい児についても、親子通園である特長のなかでできそうなことはないか検討したい。